

<訳者あとがき>

アフガニスタンと明治維新

本書のクライマックス部分を翻訳していたとき、突然私の脳裏に浮かびあがってきたのが江戸無血開城にいたる一連の史実だった。そしてその極めつきは幕府と反幕府の権力争いに最終的決着をつけた、西郷隆盛と勝海舟の歴史的会談だった。さらにはそこにいたる一連のプロセスと、本書最終章でドラマティックに叙述されるカーブル開城までのプロセスの類似性だった。敵前逃亡し水戸に引っ込んだ総大将・徳川慶喜に代わって敵軍と交渉する勝海舟。これにより江戸を血と炎の海にしかねない首都決戦を回避すると同時に内政への介入を虎視眈々と狙っていた外国勢力の思惑を封じ込めることに成功したのだった。一方、国連事務所に逃げ込んだナジブラ大統領に代わって、イスラム教を錦の御旗に押し立てて首都に迫りくるマスード司令官らムジャヒディン勢力と必死の交渉をしカーブルを明け渡すムータット副大統領。権力が入れ替わる瞬間、多少の武力衝突はあったものの、この時のアフガニスタン人は交渉によってことを処理し、いまだ武力衝突が残る極度の緊張の中、記念式典すら開催し、平和裡に権力移行を成し遂げたのである。日本ではあまり知られていないこの史実をヴィヴィッドに記録しただけでも本書の価値はあるのではなかろうか。

ところでこの「あとがき」の表題に掲げた、アフガニスタンと明治維新の対比は牽強付会な独りよがりの類ではない。このことは、タリバン政府を雨あられのような空爆と近代兵器を総動員した陸軍力で力まかせに押しつぶして成立させたカルザイ政権を支援する日本政府も、アフガニスタンの外交官に明治維新を教えるプログラムを組んだことの中にも見て取れるだろう。（平成15年2月20日付け外務省プレスリリース「第1回アフガニスタン外交官研修の実施について」参照）。この研修テーマは日本側が持ち出したものではなく、アフガニスタン側からの要望にもとづいたものだったのではないだろうか。というのは、私がアフガニスタンを過去訪れた時に、現地の人に日本の発展の基本は明治維新にあったのではないかと、という質問を何度もされたことがあったからだ。

「あとがき」を書くこの機会に、アフガニスタンと明治維新について考えてみたい。そのまえに私事で恐縮だが、私とアフガニスタンの出会いから始めたい。

アフガニスタンとの出会い

テレビや新聞がソ連のアフガニスタン侵攻を糾弾する大々的なキャンペーンを行っていた1980年初頭、あるアフガニスタン留学生の紹介で、駐日アフガニスタン大使にお会いする機会があった。私がアフガニスタンを訪問するきっかけとなる出会いだった。

私にとってアフガニスタンは少年の日に偶然心を奪われたシルクロードへの憧れの中に隠れていた。中学生の頃、ラジオ作りに没頭していた。その自作ラジオで聞いた北京放送局に受信報告を送った縁でベリカードが返送されてきた。ベリカードというのは、ある放送番組の電波受信状態をレポートするとそれに対するお礼として送ってくるポストカードである。当時の少年たちにとって世界中のラジオ放送局の美しいベリカードを集めるのが流行だった。ベリカードを手始めに中国からは定期的にさまざまな印刷物が送られてくるようになった。高校生になったころ、新疆ウイグル地区の写真つきカレンダーが贈られてきた。日本人とそっくりの顔をした少年少女がエキゾチックな民族衣装を着て輪になって踊っている姿に惹きつけられた。当時は戦後初めてのシルクロードブームだった。日本人として初めてチベットに入り仏典を持ち帰った河口慧海の探検物語がNHKのラジオ番組で流された。少年の私は胸を躍らせてそれを聞いた。それ以来、無銭旅行で世界を旅すること、とくにシルクロードをマルコポーロと逆のルートでローマまで行くのが私の夢となった。

大学に入ってその夢は打ち砕かれた。入学早々ベトナム反戦運動、沖縄返還運動、大学紛争、反公害運動に首を突っ込み無銭旅行どころではなくなったからだ。決定打は、中ソ戦争だった。本来戦争はしないはずの「社会主義国」同士の中国とソ連がダマンスキー島というちっぽけな島の領有権をめぐる戦争を始めたのだ。シルクロードの幹線道路は中ソ国境をまたいでいる。旅行者が自由に通行するどころではなくなった。腐敗墮落したアメリカやソ連や中国。大国のエゴに怒った世界中の若者がベトナム反戦の抗議の嵐を巻き起こした。日本でもアメリカの言いなりになる政府に反発し若者が異議申し立てを行った。私もその一員だった。その後も国内の社会運動や金大中事件をきっかけに起きた韓国の民主化と統一を求める運動などに加担し忙しくしているうちにシルクロード横断の夢は忘れていた。そんな1979年の年末、

突如として大量のソ連軍がアフガニスタン国境を越えた。

テレビや新聞で洪水の如く流される混乱と戦乱のアフガニスタン、ソ連の軍事的な悪行。そんな報道に晒されているうちに、一体、アフガニスタンの一般民衆はどんな生活をしているのだろうか、アフガニスタンの本当の姿はどうなっているのだろうかと疑問がふつふつと湧いてきた。そんな時、偶然お会いした駐日アフガニスタン大使に率直に疑問をぶつけてみた。すると、大使は「取材したらどうですか」と気軽な調子で返答された。それが本書のアブドゥル・ハミド・ムータット大使だった。外交官というより、若くすらしとしたスマートでハンサムな「武人」だった。かく言う私も31歳。知力・気力・体力のすべてが充実した好青年（だったはず）。そんな私だったが、取材したら、と気軽に言われても、西側諸国はソ連とアフガニスタンを経済的・政治的に制裁し、マスコミも取材をボイコットしていた時だ。そこを正式に取材するのはかなり勇気が必要だった。さしずめ今なら北朝鮮政府の正式ビザで入国し金正恩にインタビューしに行くようなものである。しかし当時の反ソ反アフガニスタン・キャンペーンは今の反北朝鮮キャンペーンとは比べものにならないほど凄まじいものだった。

数々の障害を乗り越えて、結局、私はアフガニスタンに行くことにした。思ってもみない形で少年の日の夢の一部が叶うことになった。出発するとき、西側諸国から正式ジャーナリストビザで入国する初の記者だといわれた。1980年8-9月に40日間アフガニスタンを取材し、そこでの見聞を原稿に書いたり、スライド映写機を担いで日本各地で話して回った。翌年『新生アフガニスタンへの旅—シルクロードの国の革命』を出版した。その後、80年代の10年間に十度アフガニスタンを訪れた。自分が訪れるだけでなく、延べ100人以上の人びとをアフガニスタンの調査・訪問に送り出した。何冊も訪問者によるアフガニスタン訪問記を出版した。そしてアフガニスタンに関心を持つ人びとや訪問者たちと「アフガニスタンを知る会」を、そしてその発展形として「日本アフガニスタン友好協会」をつくり、アフガニスタンの真実を日本に伝える活動、国づくりのさまざまなお手伝い、鉛筆やノート・古着などの支援物資の寄贈などをおこなった。その間、私はアフガニスタンで開かれたさまざまな国際会議に出席し、カルマル大統領やナジブラ大統領にもお会いした。1988年4月から10月までの半年間開催された「ならシルクロード博覧会」にアフガニスタンを代表してアフガン物産を展示販売するブースを出展した。また同時期にはソ連軍の撤退とアフガニスタンの人びとの生

活をテーマとした日本アフガニスタン合作記録映画『よみがえれカレーズ』の企画・制作にもかかわった。これらの活動のすべてをアフガニスタン側で支え、指導してくださったのがムータット大使のちの副大統領だった。

イスラム教＝改革の桎梏？

アフガニスタンを訪れるたびに、受入れを担当してくれる役所の人や取材先で会う一般の人びとから決まってくるぶつけられたのが、冒頭で述べた質問だった。「アフガニスタンと日本はアジアの中で同じころ自力で独立を勝ち取った唯“二”の国なのに、なぜ国の発展にこんなにも差がついたのだ」と。独立自尊の誇り高いアフガニスタン人にとって発展に取り残された自国の現状は耐えられないのだ。

第三次対英戦争に勝利してアフガニスタンが独立したのは1919年。彼らが日本の独立と呼ぶ明治維新は1867～68年である。日本は明治維新で独立したわけではないし、アフガン人のいうふたつの事件は年数的に50年の差がある。でもそれもまあ良いとしよう。イギリスの度重なる侵略と戦いそれに勝利し独立を勝ち得たアフガニスタンと、中国のような大国が西洋諸国に深々と蹂躪されている現実の中で独立を守り抜いた日本は、彼らにとっては同格なのである。

アフガン人からの質問に対して、最初のころは、両国の教育水準の差ではないか、と答えていた。日本の江戸時代には全国津々浦々に寺子屋があり国民の教育水準が高かったからじゃないか、と。この答はアフガニスタンの人びとにとって受け入れられやすかった。というのは、当時のアフガニスタンの識字率は10%にも満たず、女性のほとんどは読み書きができなかった。私が取材したころの政府も、国民に字を教える識字運動（“読み書き算数”の初等教育を受けさせる運動）を盛んに実施していた。だから私の答は彼らにも受け入れられ易かった。

しかし、私のこの回答はあまりにも表面的な理解にもとづくものでしかなかった。1978年、アフガニスタン人民民主共和国（PDPA）による4月革命後、識字教育、土地改革、水利改革、社会インフラ整備、諸民族融和など、全国民が“支持するはず”の進歩的・民主的政策を政府がいくら推進しても国内の武力による反対運動はやまなかった。それどころか、私が最初に訪問した1980年から反対運動は年々激しくなった。1986年には、ソ連とPDPAはカルマル議長を更迭しナジブラ政権を打ち立て、国民和解政策を採用。国名から“民主”の文字をとり（1987

年)、党名も“祖国党”と変え(1990年)、イスラム勢力との和解を進めようとした。しかし和解はムータット副大統領のドキュメントにもあるとおりに一向に進まなかった。

何度かアフガニスタンを訪問するうちに私はアフガニスタンにおける民族民主主義革命の困難性は単に国民の教育レベルや政策推進の巧拙だけの問題ではないことに気づいた。日本人には理解しづらい宗教、民族、社会発展度合い、国家観などの違いが底流に横たわっていた。アフガニスタンは国の近代化を図る場合、日本よりはるかに重い変革課題を背負っているがその最大のものは宗教、つまりイスラム教ではないかと思うようになった。イスラム教と外来思想・異種文明の衝突の激しさ、その受容の困難性が大きいのではないのか、と。

鎖国をつづけていた日本が開国を迫られた時、最初の国民的反応は「攘夷」だった。「攘夷」と「尊皇」が結びついて明治維新を牽引する思想的なバックボーンが形成された。しかし尊王攘夷派が権力を取るといつのまにか「攘夷」が消え、「尊皇」のみになった。維新政府が樹立されると国家的スローガンは「攘夷」とは正反対の「脱亜入欧」にまで、姿勢は逆転した。アフガニスタンにおける民主化は一種の「西洋化」である。従来のイスラム的価値観からの転換が迫られる。しかしアフガニスタンではそのような転換が難しい。ここに明治維新との大きな相違点があるのではないだろうか。

アフガニスタンはいまさら言うまでもなくイスラム教徒を国民の大多数とする国である。一方、民族的には主要4民族を主体に十数民族からなる多民族国家である。さまざまな民族と部族に分かれ十数の異なる言語で生活する人びとが、国の中央部に鎮座し国内の移動を困難にするヒンズークシュ山脈を取り囲むように居住する山岳国家である。人びとの意思の疎通だけでなく物理的な移動すら困難を極める。この国を国家としてひとつにまとめる共通項は少なく、イスラム教と共通語のダリ語（ペルシャ語の一種）くらいしかないのがアフガニスタンだった。そのイスラム教でさえさまざまな分派が内部で対立抗争していた。

アフガン人が明治維新と比較する1919年の独立を指導したのはアマヌラー・ハーン国王である。この国王は1917年に成立したばかりのソビエト国家を世界のどの国よりも早く承認し、モスクワを訪れてレーニンとともにパレードしたほどの開明君主だった。彼の下で国民教育の実施、婦人解放などを含む民主的な政策が推進された。当時の中東・中央アジアにおいてアフガニスタンは近代

化の先頭を走る先進国だった。だが国王の上からの急進的な民主化政策は国内の反発を買った。アマヌラー政権に反発する諸外国はバッチェ・サカウを利用して国内に反乱をおこし、政権を打倒した。政権成立からわずか10年たらずの出来事である。4月革命後にPDPA政権がたどった崩壊プロセスに極似している。

イスラム教は他の宗教に比べて宗教・政治・生活規範がより強く一体化している。アマヌラー・ハーンの改革が頓挫したのは一般国民を支配しているイスラムの感情を国内反動勢力と外国勢力が利用したからだった。4月革命の初期、アミン政権が推進した急進主義を修正しようとしたカルマル政権、さらに改革のペースを緩め反対派との妥協を模索したナジブラ政権もアマヌラー・ハーンを締めつけた桎梏から抜け出すことはできなかった。

1923年アフガニスタンにつづいて独立を勝ち得たのは同じイスラム国家のトルコだった。トルコの場合は日本やアフガニスタンと異なり、かつてはアジアからヨーロッパにまで広がる広大なオスマン帝国を築いた国である。オスマン帝国崩壊の苦渋を乗り越えてトルコ国を創建したのはムスタファ・ケマル・アタチュルク。そして彼が指導したトルコ革命だった。世界史における明治維新の比重はトルコ革命にはるかに及ばないとしてもトルコ革命を指導したアタチュルクが明治維新を参考にしていたのは有名な話だ。アフガニスタン人が自国の有り様を日本および明治維新と引き比べて語るの、トルコ革命の成功も念頭にあるだろう。

アタチュルクは、イスラム色を薄めヨーロッパ型の社会経済体制に国を導くため政教分離政策や女性隔離の緩和などを導入した。彼は掌握した軍事力を背景に、それまでのアラビア文字を使っていた国語表記をローマ字表記に変えるなどの大胆な欧化政策を強力に推進した。ところがイスラム教を生活原理とする一般民衆の世界観とキリスト教をベースとするヨーロッパ文明の融合は難航し、国の政治に常に緊張と軋みを生じさせた。それでもトルコは、アタチュルクの存命中にイスラム教国からの世俗化を十数年で成功させ、その後長い時間をかけて、EUへの加盟も可能とする「西欧化」を実現させた。

イスラム教とキリスト教の対立・抗争は双方に千年もつづく民衆意識として染みついている。2001年の9・11同時テロに際してブッシュ大統領が対テロ戦争を「十字軍の戦い」になぞらえて国際的物議を醸し出したことにもそれは現れている。このように強烈で永続的な確執は「中庸」を是とし「忘却」を特技とする日本人には到底理解不能な心理の有り様なのかもしれない。しかし、イ

スラム教とキリスト教の長くて深い対立抗争を考慮に入れても、トルコの経験に照らすとイスラム教が改革の絶対的障壁であるとは思えない。

異なる文明の対立・抗争・受容

国の民主化をソ連に頼って行おうとした80年代のアフガニスタンの試みが、アメリカ、イギリス、パキスタン、サウジアラビア、日本などの反ソ連国家の支援を受けたゲリラ勢力によって瓦解させられた92年以後、アフガニスタンはイスラムを標榜する勢力に支配されることになった。しかしその勢力、すなわち本編に登場したムジャヒディン政権は政権奪取後内部の権力争いに終始し、アフガニスタンを廃墟と化す危機に陥れた。そこに現れたのが、パキスタンとアメリカにバックアップされたタリバンだった。タリバンの存立理念は極端かつ過激なイスラム原理主義、そのなかでもアフガニスタン独特の風変わりな相貌を呈していた。

タリバンは「イスラムの原点への回帰」、「米欧のキリスト教打倒」を掲げる国外のイスラム極端派の基地になった。これを2001年の9・11事件の直後、米欧が中心となった国際軍部隊が袋だたきにした。

ここで思い出されるのは1900年に中国で起きた義和団事変である。義和団が掲げたスローガンは「扶清滅洋」、つまり「旧来の自らの文化・国家である清を守り欧米を滅ぼせ」というものであった。「尊皇攘夷」＝「イスラム遵守・欧米打破」と寸分違わぬ同一思想である。この義和団に対して、日本軍を含む英・米・露・独・仏・伊・オーストリアの8カ国連合軍が1900年8月14日に武力攻撃をかけ鎮圧したのがこの事件である。日本は連合軍6万人のうち最大の2万2000人を派兵した。北京占領後、連合軍兵士らの激しい略奪と暴行は3日間にわたってつづいたという⁽¹⁾。

中国にもイスラム諸国にも国外から欧米文明の波が激しく押し寄せた。日本ももちろんそうだった。しかし、日本が他国と異なったのは、「和魂洋才」などと立場を微妙にずらしつつ、極めて短時日で旧来の文化を捨てることに成功したことではないだろうか。

「扶清滅洋」を掲げた中国も国内の旧来思想をすて外来思想を取り入れた。マルクス主義を採用しソ連と連携した共産党が最終的に権力の座につき日本とは異なる外来思想による国づくりを始めた。そして、大躍進・プロレタリア文化大革命など極端にぶれの大きい政治的・思想的な失敗を繰り返しながら「改革開放」と「市場経

済」をベースにした中国独自の社会主義という国民統合理念にたどり着いたのである。中国はここに至りつくまでに数十年を要している。

武力に依拠した上からの改革

トルコも中国も日本も、過去からの脱却のために武力の行使、つまり内戦での勝利を通して国内反対派を徹底的に鎮圧し、国民を国家の一員として自覚させる国家意識を浸透させ、国の発展を可能とする国策＝国民統合理念を作り得たところに成功の要因があった。ここに至りつくまでにはどの国でも夥しい血が代償として流されている。このことは日本の明治維新後のふたつの内戦をみるとよく判る。そのひとつは、明治元年から翌2年にかけて戦われた戊辰戦争である。

冒頭で述べた「江戸開城」は「江戸無血開城」とも言われる。確かに西郷と勝による英断で江戸の惨状は回避された。しかしそれは、維新勢力が最終勝利を確保するための序曲に過ぎなかった。

江戸開城で権力が平和的に移行されたのであれば戊辰戦争は無用な戦争、無用な流血であったはずだ。しかしこの戦争は、新政権にとっては、旧政権残党の転覆の意欲をそぐ、つまり、「水に落ちた犬」をぐうの音も言えないほどに叩く、どうしても必要な政治プロセスと位置づけられたのであろう。これにより、薩長を中軸とする新政権は全国規模での施政を展開することが可能となった。つまり、天皇をいただくことにより日本が国として対外的に立つ準備ができたといえる。

次に必要となるのはその国の発展を決める国策の策定である。明治新政府には、「脱亜入欧」「和魂洋才」

「富国強兵」の国策を政権内部に確立するために、政権内部の反対派を鎮圧する必要がある。第2の内戦が首をもたげ始める。西南戦争である。

この戦争の理由は研究され尽くされているのかもしれないが、大きな要因のひとつは、押し寄せる欧米文明に対して、これを積極的に受容し身も心も襲来してきた文明の一部となるのか、それとも外来文明とは異なる文明を維持しつつ自立する道を選ぶのか⁽²⁾の対立だったのでないだろうか。つまり欧米文化を真似て中央で君臨し出自を忘れて豪華な生活に明け暮れる成り上がり政治家たちを維新の精神を忘れた墮落と断じて反旗を翻した西郷隆盛らの立場、思想である⁽³⁾。侵略主義的な韓国征伐を西郷隆盛が主張したと言われているが、これは西郷を血祭りにあげた勢力がこしらえた虚像であって西郷隆盛

が主張した論の実際は、怒濤のように押し寄せる西欧の圧力に対して東アジアは共通の文化文明に依拠して共同して対抗しようと呼びかけようとしたものであったことは、最近の研究によって明らかになりつつある。しかし西郷流の西欧文化受容の姿勢は東京に陣取る新政権勢力にとっては認めがたいものであった。彼らは、旧幕府勢力を武力で片付けた後、返す刀で自分たちへの最大の反対派に転じた西郷隆盛らを西南戦争で葬ったのである。このふたつの内戦を通して日本は国家建設と国家意思の統一をなしえた。

すでに述べたように江戸開城は明治維新の終わりではなく本格的な変革の序曲だった。これに対比すると、マスード司令官らムジャヒディンはカーブルは落とすけれど、軍事力をもってしても内部の不統一を解消することができなかった。それだけでなく彼らは、明確な国づくりの方針を持っていなかった。彼らの中に開明派がいなかったわけではないが、イスラム教を国民意識の要として戦えば戦うほどイスラム教の足枷をはめられ近代化への足取りは押しとどめられた。

ムータット副大統領がマスード司令官に最後に言い残したアドバイスにはアフガニスタンという国を統合する理念の必要性和力によらずに国民にその統合理念を受容させることの重要性が語られている。このアドバイスは、副大統領がカーブルを去った20年間、そしていまも、生き続けているように思われる。

デュランドライン問題

ここまで述べてきたことは、欧米文化との遭遇を契機に社会構造と国民統合プロセスの再編に取り組まざるを得なかった多くのアジア諸国にとって大なり小なり共通の体験であった。しかし、アフガニスタンには他の国々とは決定的に異なる大きな困難性が存在していた。デュランドライン問題である。

デュランドラインとは、アフガニスタンをめぐって帝政ロシアと対抗していたイギリスがアフガニスタンとの2度に渡る戦争に敗北した後、1893年、イギリス領インド外相モーティマ・デュランドがアフガニスタンをロシアとの緩衝地にするため独立を認めるとかたって当時のアブドゥル・ラーマン国王を騙し押しつけた境界線だ。これによりイギリスはパシュトゥーン人（族）が1000年以上にわたって居住してきたインダス川西岸パシュトゥーン地域の半分をアフガニスタンの独立を認める代償としてイギリス植民地領に併合した。その結果、パシュトゥーン居住地区は真っ二つに分断されてしまった

のである。その後、1947年のパキスタン独立の際にパキスタンイギリス植民者の地位を引き継ぎパキスタン領と宣言した。しかしパキスタン領と宣言されたパシュトゥーン居住地域およびアラビア海とイラン国境に接するバルーチスタン地域はこれまでのいかなるアフガニスタン政府もパキスタン領と認めておらず、未解決の国境問題となっている。しかし、これが単なる二国間の国境紛争ではなく解決が極めて難しい問題となっているのは、アフガニスタンの最大民族であるパシュトゥーン族がふたつに分断されている事実起因する。

「アフガニスタン問題とは実はパシュトゥーン問題にほかならない」——これは、ムータット副大統領が私に幾度となく指摘し教えてくれた、アフガニスタン問題の本質をつく洞察である。

戦争に次ぐ戦争で正確な統計がないので大雑把な数字で説明しよう。

- ・アフガニスタン総人口=3000万人
 - うち、パシュトゥーン人=1300万人 (43%)
 - それ以外の民族=1700万人 (57%) (タジク人、ハザラ人、ウズベク人ほか)
- ・パキスタン側在住パシュトゥーン人=2100万人
- ・パキスタン総人口=1億8000万人

この数字を見ると、この民族問題、国境問題の解決がいかに難しいかがよくわかる。仮にパキスタン側のパシュトゥーン人がすべてアフガニスタンに統合されたとすると、アフガニスタンの総人口は約5100万人となり、うちパシュトゥーン人は3300万人 (64%) となる。大統領選挙が行われるようになっている現在のアフガニスタンにおいて、いまでさえパシュトゥーン人の力が強いと不満をもっている非パシュトゥーン人にとって自らがますます少数化するこの選択はあり得ない。

また、パシュトゥーン人がアフガニスタンの一部とパキスタン側とを統合して独立することもあり得ない。アフガニスタン内部では各民族の混住が進んでおり地域分割は不可能だからだ。加えてパキスタン総人口に占めるパシュトゥーン人の人口比率は12%たらずだが、パシュトゥーン人（パシュトゥーン人居住地）とバルーチスタン（バルーチ族居住地）を失えばパキスタンは領土の半分以上を失うことになる。パキスタンにとって国家存亡の危機となる。あり得ない選択である。

一方、パキスタン側に住むパシュトゥーン人はパキスタン政権内に入り込み政治的、軍事的、経済的なうまみを享受している。彼らにもその権益を手放してまで政治的独立を追求する動機は生じない。むしろ、パキスタン

の「連邦直轄部族地域」と呼ばれるパシュトゥーン部族自治区特権を利用し、アフガニスタンを支配しているパシュトゥーン人と連携して部族的な特権的利害を追求するほうが「賢明」というものである。ムータット副大統領が本編のなかでナジブラ大統領の「部族政策」を批判しつづけたのはここにその根拠がある。

かつてのソ連軍も、そしてまた現在のアメリカおよびNATO軍も、パシュトゥーン人のこの特殊な存在に悩まされつづけてきたのである。しかしこの現実、外国勢力にとって困惑の種であるよりも、この地域に住む人びとにとってより深刻な死活的問題である。解決不能にも見えるこの問題の発生源は120年前のイギリス植民地政策であった。アフガン問題と同様に解決困難なパレスチナ―イスラエル問題もその根源は第2次世界大戦中のイギリスの二枚舌政策にあった。世界はいまだにイギリス植民地主義の負の遺産に苦しみつづけているのである。

カルザイ大統領とナジブラ大統領

アフガニスタンからアメリカを先頭とする外国軍が撤退を始めた。アメリカは2012年には3万5000人を撤退させる計画を発表し実行に移しつつある。ただしこの数字はさしあたり2009年から同10年にかけてオバマ大統領が増派した分を撤退させるだけであり、依然十数万人の外国軍はアフガニスタンに存在しつづける。とはいえ外国軍が撤退を開始した、という事実はアフガニスタンの全勢力に大きな衝撃と影響を与えている。

カルザイ大統領は西欧軍の武力を背景に、アフガニスタンの近代化＝西欧化を行ってきた。つまり、西欧の軍事力に依拠して大統領制と議会制を導入し国民統合のシステムをつくる、そして選挙による民主主義を定着させ国民意識＝国民統合理念を形成しようとしてきた。

アマヌラー王の時も、PDPA政権の時も、アフガニスタンの近代化路線に立ちふさがったのはイスラム教だった。それに民族や部族の同族意識や利害が絡みつき、複雑な政治・軍事状況が生み出されてきた。

カルザイ政権の場合も事態は深刻である。国としての正常な経済活動は崩壊し、芥子栽培と外国からの援助で生きる国になってしまった。軍閥は地方での権力を強化し近代兵器を装備しいまやアフガニスタンの国家機構の一部となっている。民族対立・部族対立は依然として消滅せず、国軍や警察を補充し訓練しても武器を持ったまま脱走するケースがなくなる。政府の汚職も撲滅できないどころかむしろ常態化している。現在のアフガニ

スタンの重石となっている西欧諸国の軍隊が自分たちを襲う経済危機を理由に、アフガニスタンの国家形成と国民統合が実現する前に撤退していけば、20年前と同じ事態が出現するのではないだろうか。

軍事力、武力によっては人の心を支配することはできない。アフガニスタンの客観条件のもとでは諸民族・部族・思想潮流の違いを力によって暴力的に決着することはできない。これまでの数十年に奪われた夥しい数の人命と流された血の量がこのことを証明している。もしこの地域にアフガニスタンという国が存続しうるとするならば、日本やその他の国が過去、暴力的過程を通じて国家形成と国民統合理念を手中にしてきたプロセスを、アフガニスタン国民も自力でかつ自らの自由意思として手中にしなければならない。アフガニスタンの場合このプロセスは徹底的に平和的でなければならない。もうすでに30年以上も戦争をつづけているにもかかわらずその手段では解決できないことが立証されたのである。アフガニスタン国内での平和的解決プロセスを保証するのはアフガニスタンに接する国ぐにとアメリカを始めとする世界共同体の内政不干涉・平和支援が不可欠である。

平和的な手段による国民統合プロセスは人類史の段階において国家というものが必要とされる限り生命体が新陳代謝するように、どの国でも常に繰り返し再現されるべきものなのだろう。

第3の開国が迫られているといわれる日本においても、明治維新後の西洋拝跪、太平洋戦争敗北後のアメリカ従属の歴史の眼前に100年の眠りから覚めて立ち上がってきた4000年来の手本であった巨竜との間でどのように自己を再確立していくのかが問われている。その際、近代日本政府に対する最大唯一の人民的内戦であった西南戦争を戦った西郷隆盛の思想＝西洋思想の野蛮性と進歩性⁽⁴⁾を認めつつ伝統的な東洋思想に足場を置く必要を強調し、人類としての共通価値の追求と実現を求めた思想⁽⁵⁾＝に立ち返るのは意味ある思想的営為であると思われる。

<注>

(1)

「(西洋が) 文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇懇説諭して開明に導くべきに、さはなくして未開蒙昧の国に対するほどむごく残忍の事をいたし、己を利するは野蛮じゃ」『南洲翁遺訓十一』

(2)

「広く各国の制度を採り開明に進まんとならば、まずわ

が国の本体をすえ、風教をはり、しこうして後ゆるやかに彼の長所を斟酌するものぞ」『南洲翁遺訓八』

(3)

「なにほど国家に勲勞あるとも、その職にたへぬ人を官職をもって賞するはよからぬことの第一なり。官はその人を選びてこれを授け、功ある者には俸禄をもって賞し、これを愛しおくものぞ」『南洲翁遺訓一』

「万民の上に位する者、己を慎み、品行を正しくし、驕奢を戒め、節儉を努め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民その勤勞を気の毒に思うようならでは、政令は行われ難し。しかるに草創の始めに立ちながら、家屋を飾り、衣服をかざり、美妾を抱え、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられまじきなり。今となりては戊辰の義戦もひとえに私を営みたる姿になりゆき、天下に対し、戦死者に対して面目なきぞ」『南洲翁遺訓四』

「租税を薄くして民をゆたかにするは、即ち国力を養成するなり」『南洲翁遺訓十三』

(4)

「西洋の刑法は、懲戒を主として過酷を戒め、人を善良に導くに注意深し。ゆえに囚獄中の罪人をも、いかにもゆるやかにして鑑戒となるべき書籍を与え、ことによりては親戚朋友の面会をも許すと聞けり。……実に文明じゃ」『南洲翁遺訓十二』

(5)

「道は天地自然の物にして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給うゆえ、我を愛する心をもって人を愛するなり」『南洲翁遺訓二十四』

<参考図書>

・ソ連侵攻直後のアフガニスタンの国づくりを記録した写真ルポ

●『新生アフガニスタンへの旅』野口寿一（群出版）

・ソ連侵攻の内幕をソ連内部の資料にもとづいて解明した書籍

●『アフガン戦争の真実』金成浩（NHKブックス）

・ PDPAとソ連軍に対する戦いをアメリカの視点から描いた書籍

● 『アフガン諜報戦争』 スティーブ・コール（白水社）

・ ナジブラ政権崩壊からタリバンの全国制覇までを描いた書籍

● 『タリバン』 アハメド・ラシッド（講談社）

・ アフガニスタン問題を歴史・宗教・社会・経済のそれぞれの視点から研究した論文集。

● 『アフガニスタン 国家再建への展望—国家統合をめぐる諸問題—』 アジア経済研究所＝企画 鈴木均＝編著（明石書店）

・ 西郷隆盛の思想を庄内藩士がまとめて頒布した原典

● 『南洲翁遺訓』（財団法人 庄内南洲会編）